

イメージの誘惑

『ボヴァリー夫人』の挿絵本について

木内 堯

はじめに

フローベールが自分の小説に挿絵をつけるのを頑なに拒否していたことはよく知られている。実際、その生前、フローベールの小説が挿絵をつけて刊行されることはなかった。ところが、その死後、挿絵入りの版が続々と刊行された。作家の意図はまさに裏切られたわけだが、それらの挿絵の中には芸術的な価値の高いものも少なくない。また、作家の意図がどのようなものであれ、挿絵が受容史の重要な一角を占めていることに変わりはないだろう。

本稿では、放送大学附属図書館に現在所蔵されている『ボヴァリー夫人』の挿絵本を取り上げたい¹。この挿絵本は世界に一冊しか存在しないきわめて希少なものでありながら、学術的な研究の対象にはこれまで一切なっておらず、そもそもその存在さえ知られていないようだ。近年、『ボヴァリー夫人』の挿絵研究は少しずつ活発になってきており、ブルーナ・ドナテリ、ブリュノ・ガリス、セゴレーヌ・ル・メンといった研究者がそれぞれ充実した論考を発表している²。しかし、これらの研究においても、この挿絵本の存在はやはり触れられていない。

本稿ではまず、この挿絵本の成り立ちを簡潔に説明した上で、そこに収められている様々なイメージを詳しく読み解いていきたい。そうすることで、『ボヴァリー夫人』の受容史の忘れられたページに光を当てることが、本稿の目的である。

¹ この挿絵本の存在は、野崎歓先生に教えていただいた。深く御礼申し上げる。また、閲覧と撮影を認めてくださった放送大学附属図書館にも、心から御礼申し上げたい。

² Bruna Donatelli, « De la page écrite à la page dessinée : les éditions illustrées de *Madame Bovary* », *Bulletin Flaubert-Maupassant*, n° 23, 2008, p. 81-96 ; Bruno Gallice, « Rémanence de *Madame Bovary* dans l'édition illustrée », *Flaubert. Revue critique et génétique* [en ligne], n° 12, 2014 ; Ségolène Le Men, « Visions romantiques et transpositions visuelles. Les éditions illustrées de *Madame Bovary* », in *Gustave Flaubert. La Fabrique de l'œuvre*, sous la direction de Yvan Leclerc, Catherine Hubbard, Anne-Bénédicte Levollant, Éditions des Falaises, 2021, p. 69-87. なお、本稿の執筆にあたっては、美術史家のセゴレーヌ・ル・メンの論考にとりわけ大きな示唆を得た。

1. 初版本から挿絵本へ

放送大学附属図書館所蔵の『ボヴァリー夫人』の挿絵本には、以下の四種類の挿絵が収められている³。

- ① フローベールの肖像画（一点）
- ② エミール・ボワルヴァンの銅版画（七点）
- ③ エドモン・モランの水彩画（三点）
- ④ アルベルト・エデルフェルトの水彩画（一点）

それぞれの挿絵についてはあとでまた詳しく見ていくことにして、ここではまずこの挿絵本の成立過程を追ってみたい。実はこの挿絵本は、1857年にミシュル・レヴィ社から刊行された初版本がもとになっている⁴。もちろん、初版刊行時には挿絵はつけられていなかった。挿絵はあとから付けられたものである。また、『ボヴァリー夫人』の初版は二巻本で刊行されたが、この挿絵本は二巻を一冊にまとめて製本し直してある。

初版本に挿絵をあとからつけるという行為は、現在の視点から見るとかなり奇異に映るかもしれない。しかし、書物に版画や手稿や書簡を綴じ込む、「トリュファージュ (truffage)」⁵と呼ばれる行為は、十九世紀後半、愛書家たちのあいだで広く行われていた。愛書家たちはそれにさらに装丁をほどこして、自分だけの愛蔵本をこしらえていたのである⁶。たとえば、愛書家のポール・ガリマールが彫刻家のオーギュスト・ロダンに依頼して、自身が所有するボードレールの『悪の華』の初版本に直筆の挿絵を描かせた話は、有名である。これは厳密には「トリュファージュ」ではないが、初版本にあとから挿絵を加えるという点では、同種の試みであると言える。

それでは、『ボヴァリー夫人』の初版本を挿絵本に作り変えたのは、いったい誰だったのだろうか。この挿絵本にはロジェ・ポルタリスという人物の蔵書票がつけられている。ロジェ・ポルタリス（1841－1912年）は美術批評家で、十八世紀美術についての著作を数多く残しているが、愛書家としても

³ この挿絵本の概要は以下の書誌にも記載されている。Georges Vicaire, *Manuel de l'amateur de livres du XIX^e siècle. 1801-1893*, Rouquette, t. III, 1897, p. 722.

⁴ Gustave Flaubert, *Madame Bovary. Mœurs de province*, Michel Lévy frères, 1857, 2 vol.

⁵ Cf. Le Men, art. cit., p. 73.

⁶ 十九世紀後半のこうした「愛書趣味」については、以下の著作に詳しい。気谷誠『西洋挿絵見聞録 製本・挿絵・蔵書票』アーツアンドクラフツ、2008年。

よく知られていた⁷。ポルタリスがこの挿絵本を所有していたことは、1889年に作成された彼の蔵書目録に記載があることから、確認できる⁸。ポルタリスが愛書家であったことを考えると、彼自身が『ボヴァリー夫人』の初版本に挿絵を入れて愛蔵本にした可能性が高い。もっとも、他から譲り受けた可能性も否定はできないが、愛書家ポルタリスの旧蔵書であることは、ひとまずたしかである。

挿絵本の制作時期については、1889年の目録に記載されていることから、それ以前であることは確実である。さらに言えば、フローベールの肖像画が1880年に制作されたものであることや（この点についてはあとで詳しく述べる）、この挿絵本に収められた三点の水彩画の作者であるエドモン・モランが1882年に世を去っていることを考え合わせると、1880年から1882年までの間に、挿絵本の制作が行われた可能性が高い。

つづいて、この挿絵本に収録されている計十二点の挿絵を順番に見ていこう。

2. 様々なイメージ

フローベールの肖像画 [図1]

表紙をめくって、最初に目に飛び込んでくるのは、タイトルページの左手に口絵として置かれた、フローベールの肖像画である。実を言うと、これはこの挿絵本のために描かれた作品ではない。元々は、1880年5月にフローベールが死去した際、雑誌『ラ・ヴィ・モデルヌ』に追悼記事とともに掲載された肖像画である⁹。それを挿絵本の制作のために流用したのだ。肖像画の作者はエルネスト・ド・リファール。『ラ・ヴィ・モデルヌ』の編集長エミール・ベルジュラが所有していた、エティエンヌ・カルジャによるフローベールの肖像写真をもとに、制作したものらしい¹⁰。

⁷ Voir Sophie Raux, « Roger Portalis », in *Dictionnaire critique des historiens de l'art actifs en France de la Révolution à la Première Guerre mondiale* [en ligne], sous la direction de Philippe Sénéchal et Claire Barbillon, Institut national d'histoire de l'art, 2008.

⁸ *Catalogue de livres rares la plupart reliés en maroquin ancien provenant de la bibliothèque de M. le baron R. P**** [Roger Portalis]*, Charles Porquet, 1889, p. 60.

⁹ *La Vie moderne*, 15 mai 1880.

¹⁰ Voir Yvan Leclerc, *Album Gustave Flaubert*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2021, p. 5-6.

フローベールの存命中であれば、作家の肖像を雑誌に掲載するのは、まず不可能であったはずだ。というのは、フローベールは自らの肖像画や肖像写真を一般に公開することを頑なに拒んでいたからである。実際、その存命中、肖像画や肖像写真が新聞・雑誌に掲載されることはけっしてなかった。フローベールが外科医になってボヴァリー夫人を解剖している姿を描いた、アシル・ルモの風刺画を唯一の例外として¹¹、当時の読者はこの作家の風貌を知る機会を一切持たなかった。フローベールは「顔のない作家」であったのである。一般の読者がフローベールの顔を知るためには、作家自身が死ぬのを待たなければならなかった。

フローベールが肖像画や肖像写真を一般に公開しなかったのは、読者に作者の顔を見せることが、「非人称性 (impersonnalité)」の美学に反すると考えていたからである。作者は作品の中に姿を見せてはいけない。それと同じで、作品の外においても姿を隠していなければならない。フローベールはそう考えていた¹²。『ボヴァリー夫人』の口絵に肖像画を使用するという話を、もしフローベールが知ったとしたら、断固反対したに違いない。この口絵はきわめて反フローベールの試みである。

エミール・ボワルヴァンの銅版画 [図 2-8]

フローベールの肖像画と同じように、エミール・ボワルヴァンによる計七点の銅版画も他所から流用したものである。これらの銅版画は、1876年に『ボヴァリー夫人』の「挿絵集」としてアルフォンス・ルメール社から刊行された¹³。この「挿絵集」には小説のテキストは付いておらず、収録されているのは挿絵だけである。フローベールは自分の小説に挿絵を入れることを禁じていたから、当時はまだ『ボヴァリー夫人』の挿絵入りの版を出版することはできなかった。そこで、挿絵を望む読者の期待に応えるために、小説のテキストは抜きにして、挿絵のみを刊行したのである。購入者は挿絵だけを楽しむこともできるし、『ボヴァリー夫人』の既存の版に挿絵を入れて、自分で挿絵入りの本をつくってしまうこともできる。作家自身はおそらく出版社

¹¹ *La Parodie*, 5 décembre 1869.

¹² フローベールと作家の肖像をめぐる問題については、イヴァン・ルクレールの論考を参照のこと。Voir Yvan Leclerc, « Portraits de Flaubert et de Maupassant en photophobes », *Romantisme*, n° 105, 1993.

¹³ *Eaux-fortes pour illustrer « Madame Bovary » dessinées et gravées par Boilvin*, Alphonse Lemerre, 1876. ボワルヴァンの挿絵については、先に挙げた論考でセゴレーヌ・ル・メンがこの挿絵画家の経歴も含めて詳しく解説しており、本稿もその記述に多くを負っている。Voir Le Men, art. cit., p. 71-73 et p. 79-80.

のこのような遣り口を苦々しい思いで眺めていたに違いない。実際、1879年に姪のカロリーヌに宛てた書簡で、フローベールはこの「挿絵集」に触れて、本と挿絵はほとんど何の関係もないと苛立たしげに述べている¹⁴。

なお、この「挿絵集」は1874年に同じ出版社から刊行された『ボヴァリー夫人』の「普及版」の別冊と見なすこともできる¹⁵。それぞれの挿絵の右上には、T. II. p. 253のように、巻と頁の番号が記載されているが、これらは1874年の「普及版」に対応している。

それでは、この「挿絵集」にはどのような作品が収められているのだろうか。収録されている計七点の銅版画のうち、ひとつは扉絵である〔図2〕¹⁶。扉絵には農家で家畜の世話をする女性の姿が描かれているが、これはおそらく、シャルルと結婚する前、父親が営む農場の手伝いをしていた頃のエンマを描いたものだろう。残りの六点の銅版画では、以下の六つの場面が描かれている〔図3-8〕。

- ① 小説冒頭の自習室の場面（第一部第一章）
- ② 旅館「金獅子」の調理場（第二部第一章）
- ③ エンマがロドルフと馬に乗って森を散策する場面（第二部第九章）
- ④ エンマがビネに遭遇する場面（第二部第十章）
- ⑤ エンマとレオンの逢びき（第三部第六章）
- ⑥ エンマの通夜で司祭と薬剤師が居眠りする場面（第三部第九章）

六つの挿絵の中でも、エンマがロドルフと馬に乗って森を散策する場面を描いた挿絵〔図5〕は、印象派絵画のような瑞々しさを湛えていて、とりわけ魅力的である。

また、ルーアンのホテルでレオンと逢びきをするエンマの姿を描いた挿絵〔図7〕も、様々な創意工夫に富んでいて、忘れ難い印象を残す。エンマは衣服を脱ぎかけた後で、部屋のドアが閉まっているかを確認しに来たところだ。小説では次のように書かれている箇所である。

¹⁴ Lettre à sa nièce Caroline du 26 décembre 1879 (Flaubert, *Correspondance*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », édition présentée, établie et annotée par Jean Bruneau, et par Yvan Leclerc pour le dernier volume, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1973-2007, 5 vol., t. V, p. 773).

¹⁵ Flaubert, *Madame Bovary. Mœurs de province*, Alphonse Lemerre, 1874, 2 vol.

¹⁶ 扉絵には作者名・作品名・出版者名が記載されているが、放送大学附属図書館所蔵の挿絵本ではこれらは消去されている。

彼女は荒々しく服を脱いだ。コルセットの細いひもを抜くと、ひもは腰のまわりで、蛇が滑るような鋭い音を立てた。素足のまま爪先立ちで、ドアが閉まっているかをもう一度たしかめに行き、着ているものを全部いっぺんに脱ぎ捨てた——そして、青ざめ、何も言わず、真剣な表情で、長々と体を打ち震わせながら、男の胸の中に倒れ込むのだった¹⁷。

ボワルヴァンの挿絵は、レッシングが『ラオコオン』で「含蓄ある瞬間」と呼んだ、過去の痕跡と未来の予告を含み込んだ瞬間を、見事に捉えている。抱擁の瞬間ではなく、その直前を視覚化することによって、観る者の想像力をかきたてることに成功している。

また、背景に目を遣ると、奥の壁には鏡が架けられていて、エンマの後ろ姿が映っているのが見えるが、よく見るとその鏡の中にはさらに別の鏡が映っていて、そこにもエンマの姿が映り込んでいる。つまり、手前の壁にも鏡が架けられているわけだ。エンマの姿は鏡によって無限に増幅していく。こうした仕掛けはエンマが少しずつ現実感を喪失していく様を表していると言えるだろう。

ボワルヴァンの作品がその後の挿絵入りの版に与えた影響についても、簡単に見ておきたい。1885年、アルベール・フーリエによる十二点の銅版画を収録した『ボヴァリー夫人』の挿絵入りの版がカンタン社から刊行される¹⁸。1876年刊の『挿絵集』を除けば、これが最初の挿絵入りの版である。ちなみに、アルベール・フーリエは1883年に『ボヴァリー夫人の死』と題する絵画を発表しているが、この絵の複製も挿絵のひとつとして収められている。

ボワルヴァンが取り上げた六つの場面のうち、小説冒頭の自習室の場面とエンマがビネと遭遇する場面を除いた四つの場面が、1885年の挿絵入りの版でも描かれている。小説のどの場面を挿絵にするかを決めるにあたって、フーリエがボワルヴァンの作品を参考にしたのは間違いない。明白な例をひとつだけ挙げておこう。旅館「金獅子」の調理場を二人とも描いているが、いずれの挿絵においても、オメーが暖炉の前に立ち、背を温めている。たしかに、小説のテキストでも、オメーが暖炉で背を温める様子が描かれているが¹⁹、

¹⁷ Flaubert, *Madame Bovary. Mœurs de province*, texte établi, présenté et annoté par Jeanne Bem, dans *Œuvres complètes*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », édition publiée sous la direction de Claudine Gothot-Mersch, 2001-2021, 5 vol., t. III, p. 399. 『ボヴァリー夫人』からの引用はすべてこの版に拠る。

¹⁸ Flaubert, *Madame Bovary. Mœurs de province*, douze compositions par Albert Fourié, gravées à l'eau-forte par E. Abot et D. Mordant, E. Quantin, 1885.

¹⁹ *Madame Bovary*, p. 214.

二人の挿絵画家がこの場面をわざわざ切り取って描いたのは、偶然とは思えない。

ボウルヴェンの連作は通常の挿絵入りの版ではない。しかし、その作品を使って数多くの挿絵本がつくれ（放送大学附属図書館所蔵の挿絵本もそのうちのひとつである）、その後の挿絵画家にとってはひとつの模範になった。すでに触れたように、フローベールはボウルヴェンの挿絵を好まなかった。しかし、その作品は『ボヴァリー夫人』の視覚化に挑戦した最初の清新な試みとして再評価に値するものだろう。

エドモン・モランの水彩画〔図9-11〕

放送大学附属図書館所蔵の挿絵本には、フローベールの肖像画とボウルヴェンの銅版画の他に、計四点の水彩画が収められている。これら四つの水彩画はいずれも一点物である。フローベールの肖像画とボウルヴェンの銅版画は他所でも見ることができるが、これらの水彩画はここでしか見ることができない。また、いずれの水彩画も、他所からの流用ではなく、この挿絵本のために制作されたものであると考えられる。まずは、エドモン・モランが手掛けた三つの水彩画から見ていこう。

一枚目の水彩画〔図9〕が題材としているのは、小説の第二部第四章でエンマとレオンが仲睦まじく語らう場面である。小説のテキストでは以下のように書かれている箇所だ。

彼女はよく彼に詩の朗読を頼んだ。レオンはゆっくりとした声で朗読し、恋愛のくだりでは念入りに消え入りそうな声を出した。しかしドミノの音が彼の邪魔をした。オメー氏はドミノが強く、シャルルを見事に六・六で負かした。それから、百点勝負を三回やると、二人とも暖炉の前に長々と横たわり、すぐに眠ってしまった。 […] レオンは眠り込んでいる聴衆を指さして、朗読をやめた。そして二人は声をひそめて話し合った。二人の会話は、誰にも聞かれていないために、いっそう楽しく思われるのだった²⁰。

挿絵では、エンマとレオンはテーブルを挟んで座っている。レオンはテーブルに肘を突き、本を片手で持っているが、詩の朗読はいまは中断して、エンマと語らっているところである。エンマは身振りを交えて相手に何か伝えようとしているようだ。レオンの背後では、オメーとシャルルが椅子に座ったまま居眠りをしている。二人の姿は背景に埋もれていて、よく注意して見

²⁰ Ibid., p. 236-237.

ないと二人がそこにいることすら気づかない。水彩画の色遣いについて言えば、テーブルクロスとランプシェードの緑色が印象的である。全体的に暗い色調の中、この二色だけが鮮やかに浮き上がっている。陰鬱な片田舎でエンマとレオンの周囲だけが明るく照らし出されているかのようだ。

二枚目の水彩画〔図 10〕は、小説の第三部第一章で、ルーアンの大聖堂を見学した後、レオンがエンマを連れて辻馬車に乗り込む場面を描いている。もとなっているのは以下の一節だ。

ところが、辻馬車はなかなか来なかった。レオンは彼女がまた教会に入らないかと心配になった。ようやく馬車が現れた。

「せめて北側の門から出てください！」まだ入り口のところにいた守衛が叫んだ。「『復活』、『最後の審判』、『天国』、『ダビデ王』、そして地獄の業火に焼かれる『神に見放された者ども』をご覧になれますよ！」

「旦那、どこへ行きます？」御者は尋ねた。

「どこへでもやってくれ！」レオンはエンマを馬車の中へ押し込みながら言った。

そして重い馬車は動き出した²¹。

挿絵でも小説のテキストと同じく、レオンはエンマを辻馬車の中へと押し込みながら、御者と言葉を交わしている。その右手では、大聖堂の守衛がいまだ諦めきれない様子で歩道に突っ立っているが、何と言ってもそのけばけばしい服装が目を引く。小説のテキストでは、守衛の容姿はこの人物が最初に登場する場面で描かれていた。「頭上には羽飾り、ふくらはぎには長剣、こぶしには杖」を持ったその姿は、「枢機卿よりも威厳があり、聖体器のように燦然としていた²²」という。細かな違いはあるものの、挿絵でも小説のテキストと同じように、大聖堂の守衛の身なりはいかにも仰々しく描かれている。背景に目を転じると、右手には大聖堂の壁面に彫られた彫像が見える。中央には「ルーアン織 (ROUENNERIES)」と「綿織物 (COTONNADES)」と書かれた看板が見えるが、このような看板は小説には登場しない。地方色を添えるための、挿絵画家の独創であろう。思い切って深読みするならば、シャルルの死後、娘が綿糸工場に働きに出されることへの暗示であると考えられるかもしれない。

²¹ *Ibid.*, p. 365-366.

²² *Ibid.*, p. 361.

三枚目の水彩画〔図 11〕に描かれているのは、シャルルである。小説の第三部第十一章で、亡き妻が保管していたレオンの手紙を、シャルルがついに発見する場面だ。

敬意からか、それとも一種の官能の欲求が調査に時間をかけさせていたためか、シャルルはエンマが普段使っていた紫檀の机の秘密の仕切りをまだ開けていなかった。ある日、ついにその前に座り、鍵をまわし、発条を押した。レオンの手紙が全部そこにあった。今度こそ、もう疑いの余地はない！²³

挿絵では、シャルルは前屈みになって「紫檀の机の秘密の仕切り」を覗いている。床に散乱しているのはそこから出てきたレオンの手紙だろう。前屈みの姿勢からはシャルルの必死さが伝わってくるようだ。

さて、以上三点の水彩画の作者であるエドモン・モランは、どのような人物だったのだろうか。エドモン・モラン（1824－1882 年）は『ル・モンド・イリュストレ』や『ラ・ヴィ・パリジエンヌ』といった雑誌の挿絵画家として活躍した。1880 年 5 月、フローベールが死去した際には、『ル・モンド・イリュストレ』に作家のデスマスクをもとにしたデッサンを発表している²⁴。本の挿絵も数多く手掛けており、1876 年に愛書家らによって出版されたメリメの小説『シャルル九世年代記』の挿絵本には、三十一の銅版画を提供している²⁵。また、シャンフルーリの著作『猫』（1869 年）の挿絵として描いたボードレールの肖像画は、この詩人に関する著作などで、今日でもしばしば取り上げられる²⁶。

エドモン・モランは、フローベールよりも三年遅く生まれ、二年遅く世を去った。生前の二人が交流したことを示す痕跡は残されていない。モランが『ボヴァリー夫人』の挿絵を手掛けたのは、フローベールの死後であると考えられる。モランは最晩年になってこの小説の挿絵を手掛けることで、同じ時代を生きながら、実生活においてはおそらく交わることのなかった作家と、芸術上の交流を持ったのである。

²³ *Ibid.*, p. 456.

²⁴ *Le Monde illustré*, 22 mai 1880.

²⁵ 気谷、前掲書、164－165 頁。

²⁶ エドモン・モランについてより詳しくは以下の文献を参照のこと。Henri Beraldi, *Les Graveurs du XIX^e siècle. Guide de l'amateur d'estampes modernes*, L. Conquet, t. X, 1890, p. 131-148 ; Marcus Osterwalder, *Dictionnaire des illustrateurs. 1800-1914 (Illustrateurs, caricaturistes et affichistes)*, Ides et Calendes, 1989, p. 715-716.

アルベルト・エデルフェルトの水彩画 [図 12]

次に、アルベルト・エデルフェルトが手掛けた水彩画を見てみよう。この水彩画は、エンマとレオンがルーアンのホテルで逢ひきする場面を描いている。もとなっているのは、第三部第五章の以下の一節である。

ベッドは小舟の形をしたマホガニーのダブルベッドだった。赤い無地の絹のカーテンが天井から垂れ下がって、ずっと低く、下に広がったヘッドボードのあたりで、アーチ型に絞ってあった —— エンマが恥ずかしがって顔を手で隠しながら裸の両腕をすぼめるとき、この真紅の色に浮き出す彼女の黒髪と白い肌ほど、美しいものはこの世になかった²⁷。

小説のテキストでは、真紅のカーテンを背景にしてエンマの黒髪と白い肌が美しく浮き立つ様子が描かれているが、エデルフェルトの水彩画はそれを見事に視覚化している。真紅のカーテンととりわけ白い肌がつくりだすコントラストは実に鮮やかである。それにしても、エンマの姿をこれほどまでにエロチックに描いた挿絵は他に例がないのではないか。当時、通常の挿絵入りの版では、このような大胆な挿絵はおそらく認められなかったはずである。愛書家向けの挿絵本であったからこそ、このような冒険が可能だったのだろう。

作者のアルベルト・エデルフェルト（1854－1905 年）は、フィンランド出身の画家である。1874 年に渡仏して以降、パリに拠点を置いて活躍した。代表作は『ルイ・パストゥールの肖像』（1885 年）。現在はオルセー美術館に展示されている。エデルフェルトの名前は知らなくても、この肖像画を見たことがあるという人は多いだろう。また、2022 年にはプティ・パレで「アルベルト・エデルフェルト フィンランドの光」と題する展覧会が開かれた。現在、フランスでは再評価が進みつつあるようだ。

このような著名な画家が、『ボヴァリー夫人』の挿絵を手掛けたというのは、それだけでも驚きである。しかも、どちらかというと硬派な題材の多い画家が、このようなエロチックな挿絵を描いているのだから、尚のこと驚かされる。エデルフェルトがこの水彩画を描いたのは、パストゥールの肖像画で名声を確立する前のことであると考えられる。おそらく、人づてに注文を受けて取り組んだ仕事だったのだろう。画家の隠れた一面を示す驚くべき作品である。

²⁷ *Madame Bovary*, p. 383.

3. もうひとつの挿絵本について

放送大学附属図書館所蔵の『ボヴァリー夫人』の挿絵本に収められた様々なイメージを、ここまでひとつずつ見てきた。この挿絵本が唯一無二のものであることがこれで明らかになったと思う。ただし、類似した挿絵本が、実は他に存在している。最後にこのもうひとつの挿絵本を紹介して終わりにしたい。

セゴレーヌ・ル・メンは先に挙げた論考で、エドモン・モランによる七点の水彩画とエミール・ボワルヴァンの連作が収められた『ボヴァリー夫人』の挿絵本の存在に言及している²⁸。ただし、閲覧することはできなかったと述べており、現在の所在も明らかではないようだ。なお、この挿絵本のもとになっているのは初版本であるが、通常の初版本ではなく、上質紙を用いてつくられた献本用の特別な版であるという。

この挿絵本は、アンリ・ベラルディという人物の旧蔵書であることが判明している²⁹。アンリ・ベラルディ（1849—1931 年）はこの時代を代表する愛書家で、ロジェ・ポルタリスとも親しい間柄であった³⁰。二人は 1880 年から 1882 年にかけて『十八世紀の版画家』と題する共著も刊行している³¹。共著を刊行するほど親しい間柄であった二人が、類似した挿絵本を所有していたのは、偶然とは思われない。二人の愛書家は、互いに協力して、あるいは競い合うようにして、『ボヴァリー夫人』の二つの挿絵本をつくったのではないか。二冊の挿絵本は姉妹本のようなものであったと言えるかもしれない。

それにしても、ベラルディ旧蔵の挿絵本に収められたエドモン・モランの七点の水彩画というのは、いったいどのようなものなのだろうか。そのうちの三点は、ポルタリス旧蔵の挿絵本と同じものかもしれない。あるいは、すべて異なる作品である可能性もある。いずれにしても、そこで新しい作品を見られることはたしかである。モランはこのように『ボヴァリー夫人』の二つの挿絵本の制作に関わっている。もうひとつの挿絵本がいつどこからか姿を現さない限り、その仕事の全容を見渡すことはできない。

²⁸ Le Men, art. cit., p. 73-76. この挿絵本の概要は以下の論文にも記載されている。Auguste Lambiotte, « Les exemplaires en grand papier de *Madame Bovary* », *Les Amis de Flaubert*, n° 13, 1958, p. 23-36.

²⁹ Cf. Henri Beraldi, *Bibliothèque d'un bibliophile. 1865-1885*, Lille, L. Danel, 1885, p. 135.

³⁰ アンリ・ベラルディについては、以下の著作に詳しい。気谷誠『愛書家のベル・エボック —— アンリ・ベラルディとその時代』図書出版社、1993 年。

³¹ Roger Portalis et Henri Beraldi, *Les Graveurs du dix-huitième siècle*, Damascène Morgand et Charles Fatout, 1880-1882, 3 vol.

なお、どちらの挿絵本も、モランの水彩画の他にボウルヴァンの連作を併録している点で共通しているが、エデルフェルトの水彩画が収められているのは、放送大学附属図書館所蔵の挿絵本だけである。その点では、こちらの挿絵本のほうが多様性に富んでいると言えるかもしれない。

おわりに

放送大学附属図書館所蔵の『ボヴァリー夫人』の挿絵本は、この小説の挿絵史において特異な位置を占めている。フローベールの肖像画とエミール・ボウルヴァンの銅版画は同時期につくられた他の多くの挿絵本にも収録されており、それほど珍しいものではない。特別なのはやはり、エドモン・モランとアルベルト・エデルフェルトの水彩画である。二人の作品は挿絵として独特の魅力をそれぞれ持っており、『ボヴァリー夫人』のために描かれた他のどの挿絵にも似ていない。また、『ボヴァリー夫人』の挿絵と言えば、1876年のエミール・ボウルヴァンの作品が最初で、その次が1885年のアルベール・フーリエの作品であると、今まで考えられていたが、モランとエデルフェルトの作品のほうが、フーリエのものよりも時期的に早いようだ。その意味でも二人の作品は重要である。

ところで、フローベールがもし『ボヴァリー夫人』の挿絵本を目にしていたら、どのような感想を抱いただろうか。自分の小説に無断で挿絵がつけられたことをやはり忌々しく思っただろうか。フローベールは十四歳のときに『愛書狂』と題する短編小説を書いている。バルセロナを舞台にジャコモという愛書狂の運命を幻想小説風に描いた作品である。十四歳のフローベールはこの主人公について、彼が愛していたのは本の内容ではなく書物の形態であったと書いている³²。『ボヴァリー夫人』の初版本を挿絵本に仕立てた愛書家に対しても同じような考えをおそらく持ったのではないか。とはいえ、こうした「愛書趣味」も文学作品の受容のひとつの形であることは間違いない。フローベールの『ボヴァリー夫人』は、ボードレールの『悪の華』などと同じく、愛書家たちに珍重される光栄に浴したのである。

³² Flaubert, *Bibliomanie*, texte établi, présenté et annoté par Guy Sagnes, dans *Œuvres complètes*, éd. cit., t. I, p. 162.

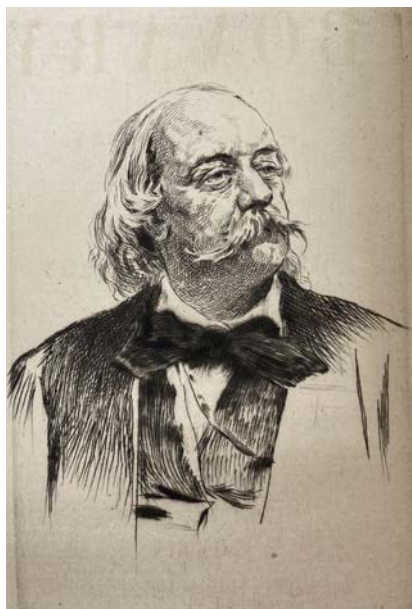


图 1



图 2



图 3



图 4



图 5



图 6



图 7



图 8



图 9



图 10



图 11



图 12

付記

本稿の図版はすべて放送大学附属図書館が所蔵している『ボヴァリー夫人』の挿絵本の一部である。図2-8も1876年刊の「挿絵集」ではなく、放送大学附属図書館所蔵の挿絵本を使用しているので、注意されたい（ただし扉絵以外は特に異同はない）。なお、撮影は執筆者による。